



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	The factors influencing the recovery of oral function and oral health related quality of life in patients with removable partial dentures. [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	岩田, 航
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(歯学)
Dissertation Number	甲第13848号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78482
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kai_Iwata_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（歯学）	氏名	岩田 航
審査担当者	主査 教授	横山 敦郎	
	副査 教授	山口 泰彦	
	副査 教授	山崎 裕	

学位論文題名

The factors influencing the recovery of oral function and oral health related quality of life in patients with removable partial dentures.

（部分床義歯装着による機能回復ならびに口腔関連 QOL 向上に影響を与える因子について）

審査は、主査、副査を含めて公聴会として行われ、論文提出者が論文内容の要旨を説明した。その後、内容について審査担当者が質問し、論文提出者が回答する形で進められた。以下に論文内容と審査の要旨を述べる。

欠損歯列に対する治療として、部分床義歯（RPD）が一般的に用いられているが、RPD の設計が、口腔機能の回復にどのような影響を与えるかについて臨床的に検討した報告は少ない。本研究においては、RPD についての調査研究を行い、経時的な機能回復を主観的、客観的に評価した。さらに口腔機能の回復に影響を与える因子を検討した。

研究対象者は、北海道大学病院義歯補綴科にて 2016 年 7 月～2018 年 12 月までに RPD を新たに装着した患者とした。調査項目は、年齢、性別、残存歯数、咬合支持数、Eichner 分類、Kennedy 分類、支台歯数、支台装置数、支台装置の種類、人工歯数、根面板の有無とした。客観的評価項目は、咀嚼能率を用い、主観的評価項目は、口腔関連 QoL (OHIP-J スコア) を用いた。新義歯装着前(BL)に各調査項目に加えて咀嚼能率、OHIP-J を評価し、新義歯装着後 3 か月(3M)および 6 か月(6M)に咀嚼能率、OHIP-J の調査を実施した。統計解析は、経時的変化について Wilcoxon の符号付順位和検定を行い、機能回復に影響を与える因子についてロジスティック回帰分析を行った。

最終的な解析対象者は 86 名であった。咀嚼能率は、BL から 3M にかけて有意に上昇し、その後、6M にかけて減少した。また、BL から 6M の間に有意な上昇を認めた。これらの結果には、義歯の適合状態や咬合状態の変化が影響していることが推察された。

咀嚼能率の回復に影響を与える要因として、性別、BL 時の咀嚼能率、支台歯数、根面板の有無、人工歯数が認められた。義歯の設計に関する要因としては、支台歯数が多い

ことや根面板の存在が影響していたが、これらは、義歯の動揺に影響を与える要因であり、義歯の沈下が抑制され、義歯の動揺が小さくなることで咀嚼能率の回復量が大きくなったと考えられる。

OHIP-J スコアは、BL から 3M にかけて有意に減少し、3M から 6M には有意差は認められなかったが、BL と 6M の間に有意な減少を認めた。咀嚼能率は 3M から 6M にかけて減少しているものの、口腔関連 QoL に有意な変化はなかった。これは、咀嚼能率が、口腔関連 QoL に与える影響が少ないことを示唆している。口腔関連 QoL の回復には、支台歯数と支台装置数が影響していることが明らかとなった。支台歯数が多い場合には、義歯の動揺が抑制され、使用感が向上することが考えられるが、支台装置数が多い場合には、義歯の設計が複雑となり装着感が悪化することが考えられる。支台歯数と支台装置数は密接に関係する項目であり、義歯の設計への配慮が必要になると考えられる。また、口腔関連 QoL は主観的評価であり、精神的心理的因子が大きく影響していたことも考えられる。

本研究の結論として、義歯の動揺を抑制することで口腔機能はより回復し、加えて義歯設計を単純化することで口腔関連 QoL が向上する可能性が示された。

上記の論文内容及び関連事項について、以下の項目を中心に質疑応答がなされた。

1. 本研究計画立案に際しての構築した仮説と研究結果の一致について
2. 先行研究に対する本研究の特徴と優位性について
3. Sample数、調査項目ならびに測定方法の決定方法について
4. 咀嚼能率における男女差ならびに差が生じる原因について
5. GOHAIではなく、OHIP-Jを選択した理由について
6. OHIP-Jにおける心因的要因ならびにそれがOHIP-J全体の結果に及ぼす影響について
7. 咀嚼効率が3Mから6Mにおいて低下した原因について
8. 今後の研究の展望について

これらの質問に対して、学位申請者から明快な説明と回答が得られたとともに、今後の研究に対する展望が示された。

学位申請者は、従来、力学的な研究や述者の経験から論じられることが多かった義歯の設計について、臨床研究により主観的ならびに客観的な評価を行い、義歯の設計が機能回復と口腔関連QoL に影響することを明らかにした。本研究の内容は、有床義歯補綴臨床の発展に寄与するものと評価され、学位申請者は博士（歯学）の学位授与に値するものと判定された。